

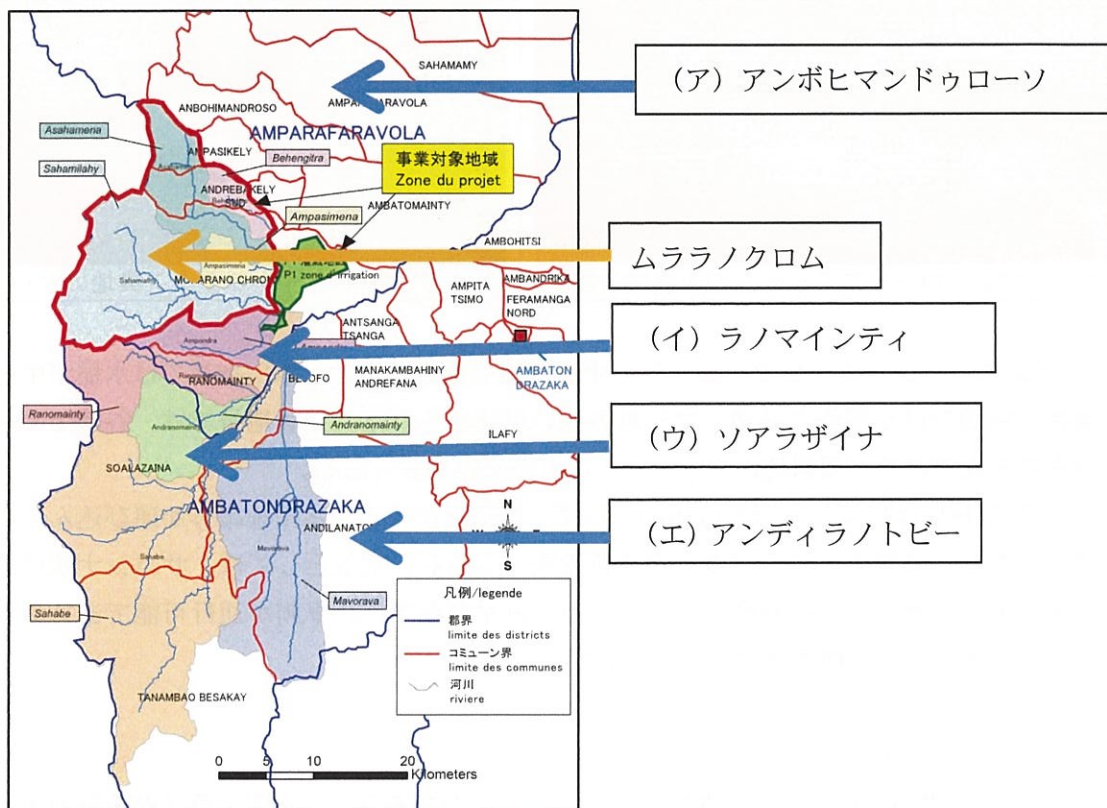
プロジェクト対象地周辺のコミューン調査報告

プロジェクト活動の拡大の可能性を探る情報収集の一環として、現在のプロジェクト実施地域の周辺 4 コミューン、アンボヒマンドゥローソ、ラノメインティ、ソアラザイナ、およびアンディラノトビーを訪問した。以下にそれらの現状をまとめる。

1. 訪問参加者名
2. 訪問先コミューン位置図
3. 訪問先コミューンの現状
4. 行程
5. 所感
6. コミューン詳細地図
7. グーグルマップによる訪問先コミューンとその他集落の位置および写真（インターネットアドレス URL）

1. 訪問参加者名：野田専門家、大石専門家、Carol、Ferena

2. 訪問先コミューン位置図（詳細は 7. 各コミューンの地図を参照ありたい）



出所：JICA SAPROF 最終報告書 2009 年

3. 訪問先コミュニティの現状（基礎情報は添付する表を参照のこと）

(ア) アンボヒマンドゥローソ

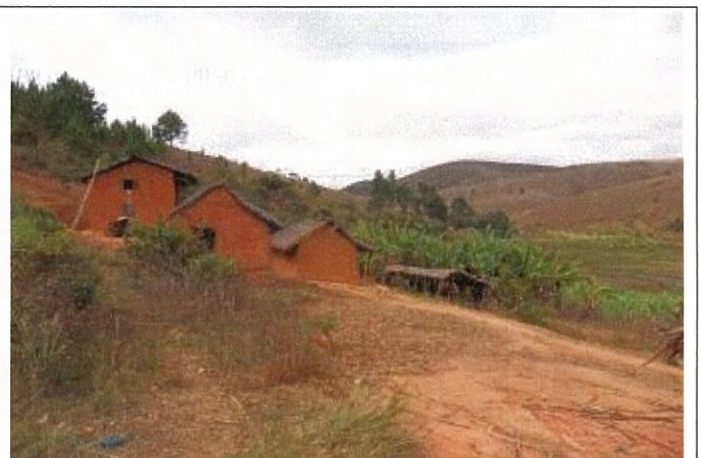
アンパシケリーの北に隣接する当コミュニティは、アンパシケリー同様に東西に長い。面積は 120 km²、5つのフクタンがあり、人口は約 22,000 人(現地スタッフによる調査)である。

東西の環境が大きく異なる。東部はアロチャ湖に続く平坦な地形に水田が広がり、国道 3 A号線が貫通する。同国道沿線は人口が集中する地域となっており、沿線の 3 フクタン、アンボヒマンドローソ、アンタナマンバオ、アンボヒペノに約 90%のコミュニティ人口が分布する。具体例を挙げれば、アンタナマンバ内のセクターの一つであるゴルフ (Golf) の人口は 5,800 人で、独立したフクタンになるべく画策しているとのことである。

他方、当国道を離れ、すでに対象地域になっているアンパシケリーのアンパンドリアンチャーラに向かう道を西に 30 分ほど車で走ると丘陵地帯のアンパヒマイナ フクタンに入る。同フクタンの総人口 1,000 人ほどであり、人口が集中する中心村を離れると、数件~数十件からなる集落がいくつか点在する程度である。



アンボヒマンドローソコミュニティの上流域の様子



アンパヒマイナフクタン奥地のサハメナ集落

アンボヒマンドローソコミュニティの中心的な生業としては、水田地帯では水稲が中心で家屋の周辺では小規模な菜園、ウシ用の囲いが認められた。丘陵地帯では、谷地での水稲はもちろんであるが傾斜地のキャッサバなどの畑作も多くなる。

水田地帯には目ぼしい森林は認められず、燃料となる薪は水田地帯外か運び込んでいる様子である。傾斜地ではラバカも相当数見受けられる。植生としては、サバンナ状の草地が主であり、植林による密度が低いユーカリ林が散在する。車両が通行可能である道から見える範囲には、原生林はみかけられなかった。

(イ) ラノマインティ

国道 3A 号線沿いのムララノクロム南部のフクタンであるアンボディラノから首都アンタナナリボ方向（南西）に向かって伸びる悪路がラノマインティとソアラザイナの両コミュ

ーンに続く道である。この道のムララノクロムコミュン側の終わりにはチェックゲートがあり、木材やコメを搬出するトラックから通行料を徴収している（コメ搬出トラック用10トントラック1台3万アリアリとのこと）。

ムララノクロムの南に隣接するラノマインティコミュンは、総面積概算70km²弱（JICA SAPROF 2009では393km²となっているが、明らかに大きすぎる）で、6つのフクタンからなる。JICA(SAPROF 2009年)によると人口は約15,000人である。

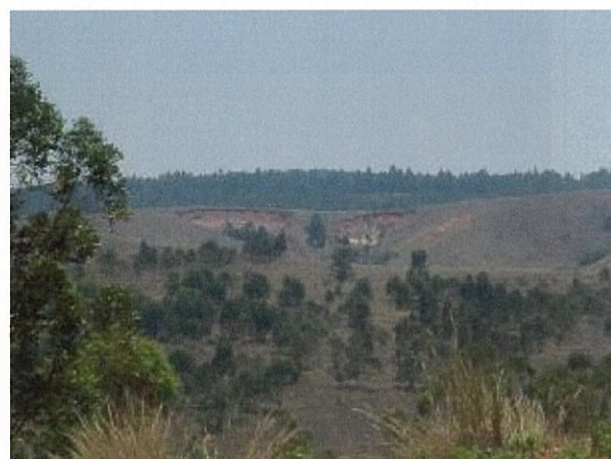
同コミュンでは南北で環境が異なっている。ムララノクロムに隣接する北部は水田地帯から延びる緩やかな丘陵地帯であり、水田地帯の源流の扇状地には水田が広がっている。

人口は水田地帯あるいはその周辺に多く分布している様子である。現時点で現地スタッフから共有されているデータでは総戸数は2,080で、約70%が、水田地帯とその外縁に位置する3フクタンのラノマインティ、ラノフォツツイ、フィアダナナに分布する。

コミュンの中心フクタンであるラノマインティをさらに南下すると1960年代の植林事業で造林されたユーカリとマツの大規模な森林が展開する山岳地帯となる。車両で通行中、道路から数件からなる集落がいくつか確認できたが、人口密度は大変低い様子である。



ラノフォツツイ中心部



ラノフォツツイ近辺のラバカ

中心となる生業は、水田地帯では水稲が中心で家屋の周辺では小規模な菜園、ウシ用の囲いが認められた。丘陵地帯では、小規模でも谷地があれば水稲栽培がおこなわれている。傾斜地でも小川沿いにはバナナなどの果樹があり、キャッサバなども栽培されている。森林地帯に挟まれて存在する草地ではウシが放牧されている。

同コミュンの北部は水田地帯に属するため、森林からは遠い。しかし、南部では、森林資源に比較的近く、燃料となる薪への供給は十分な様子である。森林地帯では、比較的勾配が急な地域でラバカがいくつか確認された。

(ウ) ソアラザイナ

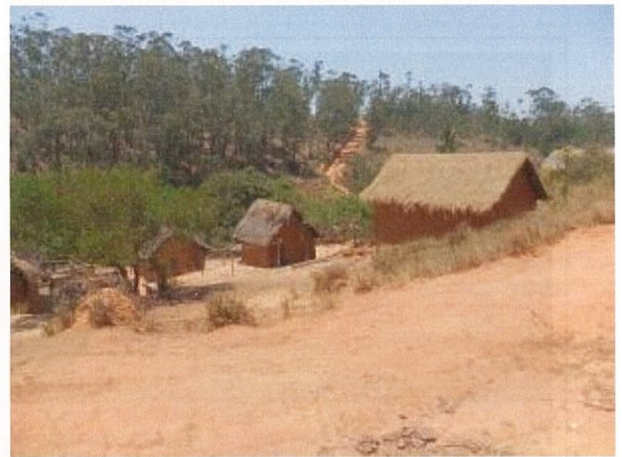
ラノマインティの南に位置するソアラザイナコミュニティは、やや南北に長い形で、総面積 409 km² (JICA SAPROF 2009 年)。5つのフクタンがあり、人口は約 15,000 人(現地スタッフによる調査)であることから、ラノマインティに比べて人口密度が大変低いことが想像できる。

同コミュニティでは、人口の約 80%が、東部の 3つのフクタン、ソアラザイナ、アンバトベ、ヴォヒツォアに偏在しており、東部の奥地に存在する 2つのフクタンの人口は少ない。東部は車両での通行が可能であるが、奥地は車両によるアクセスは困難である。

現在のプロジェクト対象地域と異なり、造成されたマツを中心とした森林が大規模に広がっている。そのため、かなりの地域が無人であることが想像される。丘陵地帯は、現在のプロジェクト対象地域に比べて傾斜が緩やかなうえに、植生も多いためか、ラバカは少ない。谷地の奥まったところでは、ユーカリや果樹に加えて原生樹も残っているように見受けられた。



同コミュニティ内に広がる松林



同コミュニティ内の集落の様子

同コミュニティの中心的な生業としては、豊かな水量を利用し、せまくても平地であれば水稲を、傾斜地の草地は放牧で利用されていると考えられ、さらなる植林のために供される場所は少ないと推察される。

(エ) アンディラノトビー

ムラマンガからアンバトンドラザカに続く国道 44 号線が貫通する同コミュニティの自然環境については、プロジェクトメンバーには想像しやすい。

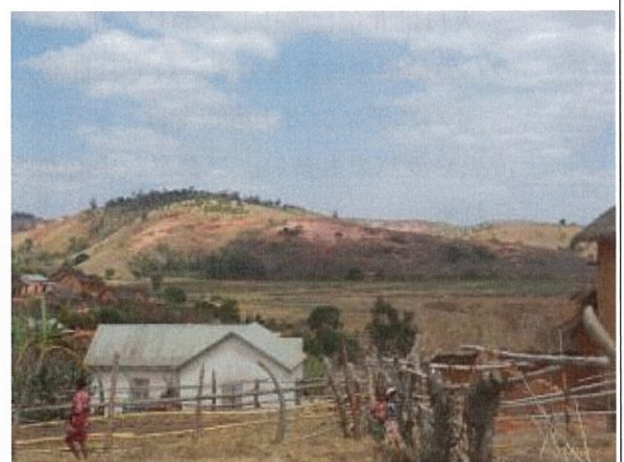
同コミュニティは大きく、総面積 556 km²で、14のフクタンからなる。人口は約 22,000 人(JICA SAPROF 2009 年)である。今回の踏査では、PC23 区に流入するサハベ川流域であるコミュニティの西側の一部を訪問した。その流域に含まれるのは、9つのフクタンである。

PC23 区に流れ込む河川は同コミュニティの西半分には位置するサハベ川とモラヴァラ川である。これらの河川とその支流が、アロチャ湖に向かって北流することで、谷が南北に形成され、それらの間に山地が櫛状に分布している。そのため、河川と河川に挟まれた丘陵地間のアクセスが難しい状況が生まれている。

例えば、サハニディンガナフクタンは同コミュニティの中央部からやや東を貫流するサハベ川の沿岸に位置する。比較的人口が集中しているフクタンで、国道 44 号線からの直線距離は約 8 km であるが、同コミュニティの中心であるアンディラノトビーから到達するためには、いったん隣接するコミュニティであるベジョホ方向へ北上する必要がある。尾根伝いに南下し、サハニディンガナに向かうが、同フクタンの中心に至る直前でサハベ川と遭遇する。河床は乾季にほとんど水量がないので車両で渡ることができるが、雨季（11-3 月）には川幅は 30 メートルほどで、深いところでは人の肩ほどになる。



サハニディンガナを貫流するサハベ川



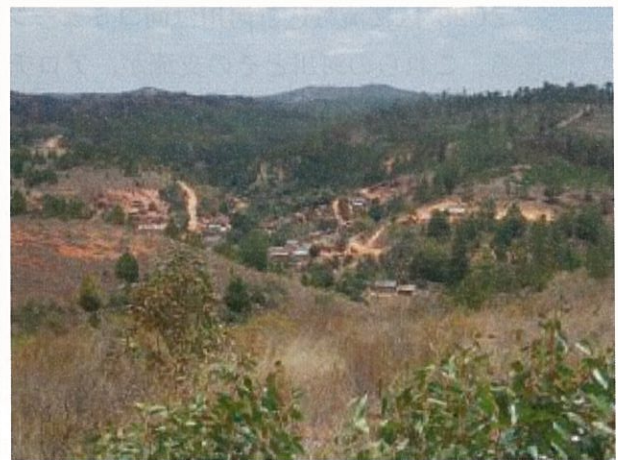
サハニディンガナ中心村周辺の様子

サハニディンガナがあるサハベ川沿岸には平野は南北に延びる水田地帯が広がり、いくつもの集落を擁する。この水田地帯に沿って分布する集落間を直接つなぐ道の多くは水田地帯を通過する貧弱なもので、グーグルアースなどの衛星写真からもバイクや車両は通行不能であることがわかる。

国道 44 号線沿いにもいくつかの集落が散在する。その一つラノフォツツィにはチェックゲートがあり、トラックなどから通行料を徴収している。そこから約 22 キロ南下すると、アンドラノコバカ フクタンがある。その分村の一つであるアンボニツィモはさらに 2 キロほど南下した位置にあり、そこから同コミュニティ最南のフクタン、アンツァパニマハヅに向かう道が延びている。踏査で訪問した 10 月下旬には車両の通行を許さない状況であり、アンツァパニマハヅへの訪問は断念した。



国道 44 号線沿いの様子



アンツァパニマハゾの様子

人口は北部に集中しており、サハニディンガナとアンツァパニマハゾの間に広がる広いラバカ地形では集落も限られており、人口密度は低いようである。

サハニディンガナ近辺では、植生はサバンナ状の草地で、樹木も限られており、表土の流失やラバカも多い。フクタン中心から離れると表土がむき出しになったはげ山が多くみられる。

国道 44 号線から見るコミュン中央部は東西両側とも表土がむき出したはげ山とラバカが多くみられる。アンツァパニマハゾ近辺は、サバンナ状の草地で表土の浸食はあちこちで見られるが、マツなどの疎林もあり、薪の不足はさほど深刻でないように見受けられた。

4. 行程

訪問月日	コミュン	フクタン A	フクタン B	所要時間*	走行距離*
10 月 18 日	アンボヒマントウロツ	アンボヒマントウロツ	アンパヒマイ	30 分	12 km
		アンパヒマイ	ザハメ	20 分	6 km
		アンボヒマントウロツ	モクオラ	10 分	5 km
10 月 23 日	ラノインティ	アンパイボ (ムララクロム)	ラノインティ	50 分	18 km
		ラノインティ	ラノオツイ	7 分	2.5 km
	リアラザイ	ラノインティ (ラノインティ)	リアラザイ	30 分	7.5 km
		リアラザイ	ウオヒツオア	15 分	4.5 km
		リアラザイ	アンパトベ	30 分	14 km
10 月 24 日	アンディラノトビ	アンディラノトビ	サハニディンガナ	40 分	13 km
		アンディラノトビ	アンドラノコバカ	30 分	22 km

*所要時間と走行距離はフクタン A・B 間

5. 所感

4つのコミュニティで、それぞれ多様な自然・社会状況である。近隣とはいえ、現在のプロジェクト実施対象地とは異なる点もある。例えば、ソアラザイナコミュニティは森林地帯が広がっており、村人の中で植林の振興の需要があるとは思われない。また、東西に長いアンボヒマンドゥローソでは、東野は水田地帯の人口密集地となっているが、西部は丘陵地で小規模な集落が散在するなど、適切な普及のアプローチが異なるであろうと思われる。各地域の状況に対応するために、現地のニーズを十分にくみ取ることができる普及の体制が望まれる。例えば、一つのコミュニティを対象にした場合でも、1度に対象にするのではなく、実施開始1年目はアクセスが良いフクタンや分村に限定し研修活動を実施する。同時に、遠隔地の住民間へのプロジェクトについての情報の浸透と理解の深めつつ、2年目以降、遠隔地も対象地としていくなどが考えられる。段階的なアプローチにより、現地住民の当該プロジェクトに関する理解が深まって、効率よいコミュニケーションが可能になりニーズの把握もできやすくなるだろう。

6. グーグルマップによる訪問先コミュニティとその他集落の位置及び写真

アンボヒマンドゥローソ

https://mapsengine.google.com/map/edit?mid=z6DamURjeQ04.koh-gErc_p3g&hl=ja

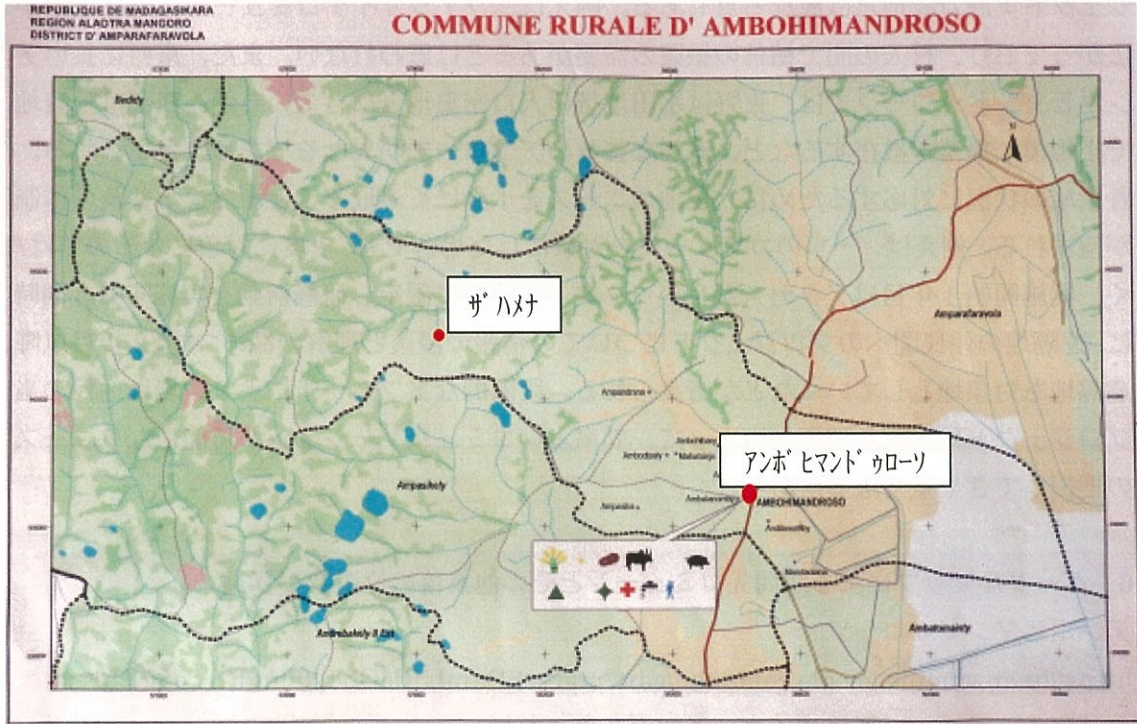
ラノマインティ、ソアラザイナ、アンディラノトビー

<https://mapsengine.google.com/map/edit?mid=z6DamURjeQ04.kJRvc9apy6XY>

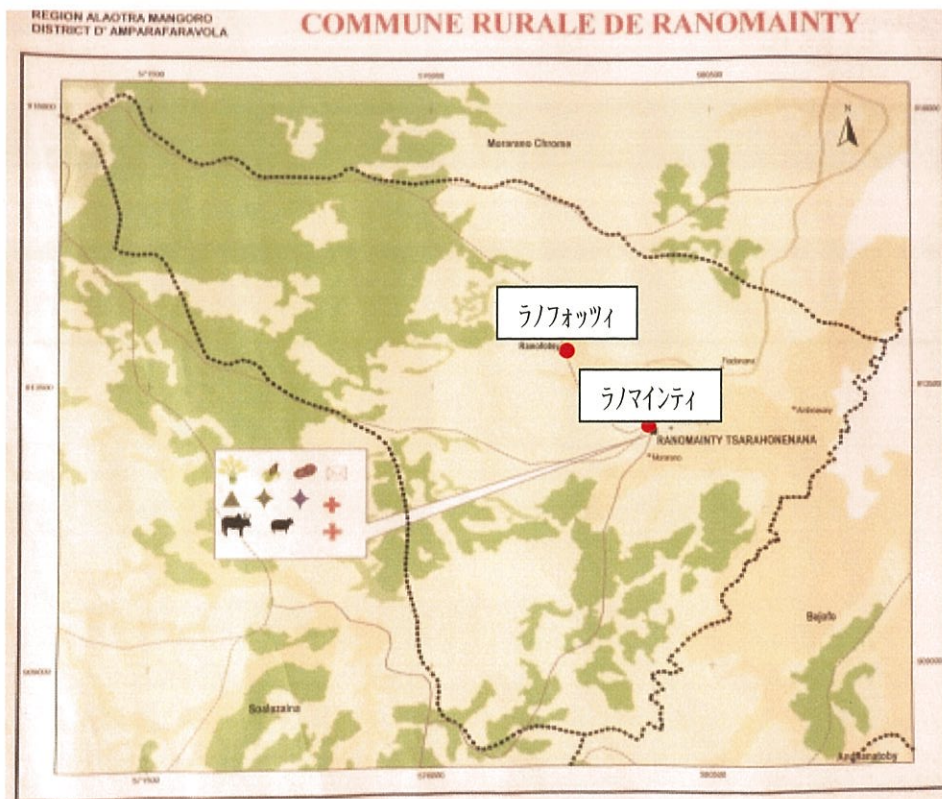


7. コミューン地図

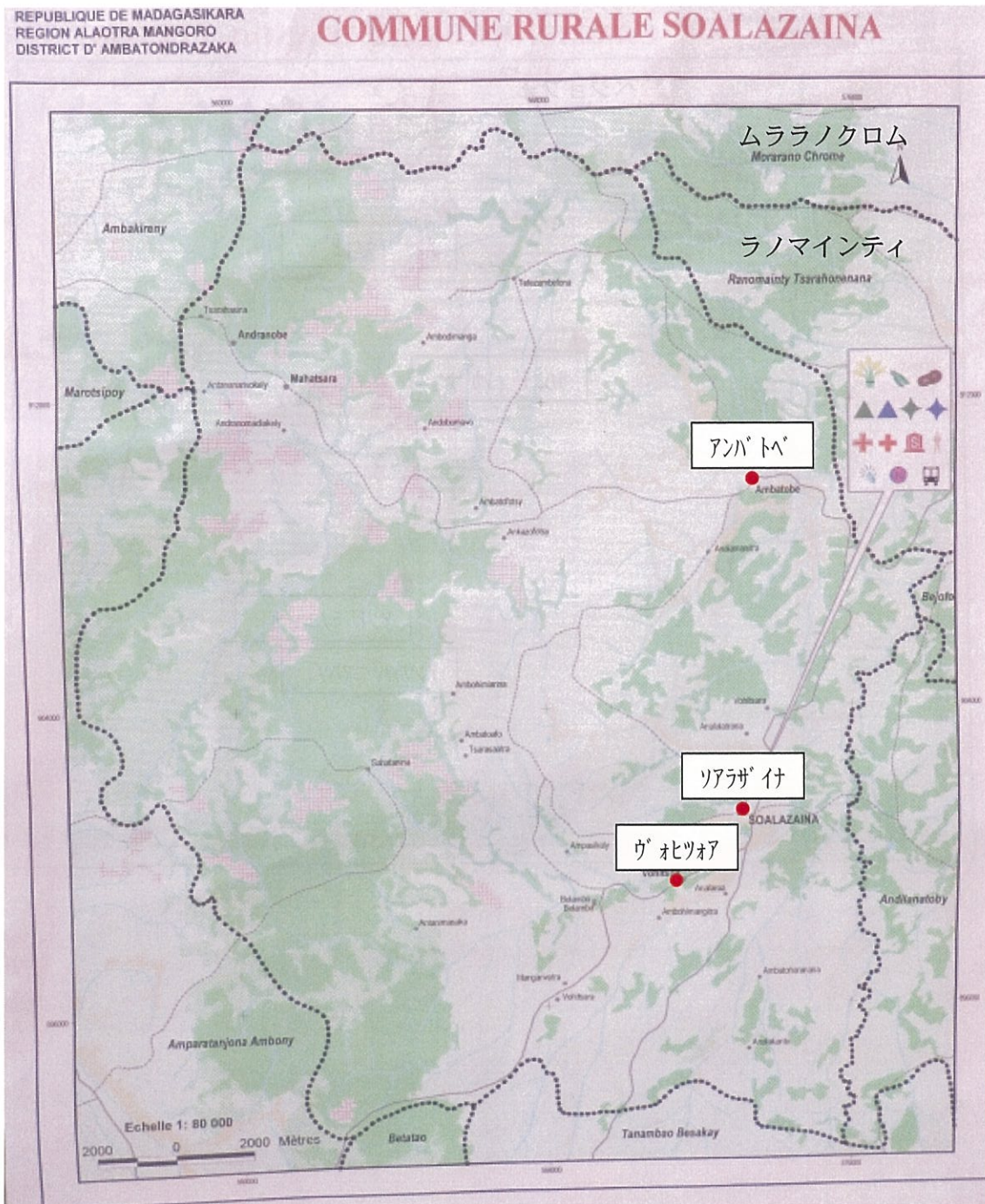
(ア) アンボヒマンドゥローソ



(イ) ラノマインティ



(ウ) ソアラザイナ



(エ) アンディラナトビー

